

お銀お玉

野村胡堂

一

「親分、変な事があるんだが——」

ガラッ八の八五郎が、鼻をヒクヒクさせながら来たのは、後の月が過ぎて、江戸も冬支度に忙しいある朝のことでした。

「手紙が来たんだろう、恐ろしい金釘流で、——両国の蟹沢のお銀が死んだのは唯事じゃねえ。とむら葬いの済まぬうち、検屍を頼む——とこう書いてある筈だ」

銭形の平次は粉煙草をせせりながら、少し節をつけて言うのでした。

「親分は、どうしてそれを？」

ガラッ八は眼を円くしながら内懷を探っております。

「千里眼だよ。八五郎の懷中などはことごとく見通しさ。その手紙の入っている大一番の野暮な紙入の中に、質札しちふだが二枚と、一昨日ももんじい両国の獸肉屋で掻つま払った妻揚枝つまようじが五六本、それから寛永通宝かんえいつうほうが五六枚入っている筈だ。大胆不敵だね、それで江戸の町を押し廻すんだから」

「ど、どうしてそんな事が分るんです、親分」

ガラッ八の眼の色が少し変ります。

「八五郎さん、騙だまされちゃいけませんよ。ここへもそんな手紙が来たんですよ」

お静はたまり兼ねてお勝手から助け舟を出しました。

「なんだ、つまらねえ。それならそれと、冒頭はなっから言えば宜い

のに」

「種を明かしちゃ、どんな手品だってつまらなくなるよ。——と
ころで、蟹沢一座のお銀というのをお前は知っているのか」

銭形平次はようやく真面目な話に還かえりました。

「江戸中で知らないのは銭形の親分ばかりだ。両国一番の人気者
で、いやその綺麗なことと言ったら」

「馬鹿だなア、涎よだれを拭きなよ。両国の軽業かるわざ小屋の女太夫に夢中
になって、立派な御用聞が毎日通っちゃ見つともないぜ」

「毎日は通いませんよ、せいぜい三日に二度」

「呆れた野郎だ。それほど執心しゅうしんなら飛んで行くが宜い。お前が顔
を見せなきゃお銀も浮ばれまい」

「だから親分も行つて下さいよ。両国は石原の利助親分の縄張り
だが、利助親分は相変らず床に就いたっ切りで、可哀そうにお品
さんが独りで気を揉んでいる」

「お品さんのせいにして、俺をおびき出す気だろう。まア宜いや、
行つて見よう」

「有難てえ」

ガラッ八はいそいそと先に立つて案内するのでした。

蟹沢一座というのは、そのころ軒を並べた両国広小路の見世物
小屋の一つで、座主ひやくだゆうの百太夫というのは、大した芸ではありませ
んが、お銀、お玉の二人の娘太夫が評判で、その上品な美しさが、
評判になっておりました。

姉のお銀は十九か二十歳、歌が巧たくみで、踊りの地もあり、身軽
な芸は不得手ですが、水芸や小手先の手品、そう言ったもので客
を呼び、妹のお玉の方は十六七、これは軽捷けいしやうな身体が身上しんしやうで、綱



渡りから竹乗り、撞木飛び、人のハラハラするような危ない芸当が得意でした。

お銀の優しく愛くるしいのに比べて、お玉は色の浅黒い品の良い顔立ちで、姉妹という触れ込みですが、どこかひどく違ったところがあります。座主の百太夫は大袈裟な道化た調子で人を笑わせますが、大した芸のある男ではありません。四十がらみの、少し肥って来た身体が、芸の邪魔をしているのでしょうか。百太夫の女房お徳は、三十五六の達者な女で、これは三味線も掻き鳴らし太鼓も叩きのめし、下座の鳴物ひと通りは何でも間に合わせる調法者、青黒い額に疳癩筋がピリピリと動いている種類の大年増です。

銭形平次と八五郎が行ったのは、もう昼近いころ、蟹沢の小屋は木戸を閉めて、裏には石原の利助の子分たちが二三人、厳重に

見張っております。

「銭形の親分、ちょうど宜い塩梅でした。ともかくも死骸を持出すのを止めておきましたよ。百太夫の家は緑町なんだそうで、小屋から葬とむらいは出したくないって言いますが――」

「石原の兄哥のところへも、変な手紙が行ったんだね」

「それでやって来ましたが、検屍をお願いしてありますから、追付け旦那が見えるでしょう」

「そいつは宜い工合だ。ちよいと検屍前に見せて貰おうか」

平次は裏から小屋へ入って行きます。

二

「銭形の親分さん、入らっしゃいまし」

薄暗がりから、大塩辛声おおしおからこえを掛けたのは、木戸番の伝六という三十男でした。

渋紙色しぶがみに焦やけてさえいなければ、顔立も尋常ですが、手足と顔の外は、寸地も白い皮膚のない大刺青ほりものの持主と後でわかりました。平次一行の姿を見ると、脅おびえたようにコソコソと物蔭に隠れたのは、横幅の方が広い怪奇な人間。これは万之助まんしよと言つて、口上こうじょう言いの一寸法師です。もう三十五六にもなるでしょうが、一寸見は十七八とも見える幼顔おきながおで、舞台へ白粉をつけて出るのが、何よりの楽しみと言った、不思議な好みに引摺ひきずられて、ほんの食扶持くいぶちだけでこの小屋に雇やとわれております。

「御苦勞様で御座ございます、銭形の親分さん」
たった一つしかない楽屋の大部屋に、不味まずそうに煙草を喫んで

いた座主の百太夫は、平次の姿を見ると、引っ掛けていた丹前を滑らせて、それでも丁寧したたに挨拶するのでした。小肥りの強かそうな面魂ですが、舞台から客を笑わせ馴れているので、どこか小慥こり巧こうらしい愛嬌のある男でした。

「お銀が死んだそうじゃないか」

「そのことで、落胆がっかりしております。この小屋に取っては大事な米櫃びつで、へえ」

「死に様が変だという話だが――」

「自害じがいでございますよ、親分さん。なんだって死にたくなかったか、あつしには見当もつきませんが、死のように事を欠かいて、自分で舌を噛み切ったんで、へえ。さっそくお届けをするとよかったんですが、小屋にケチがつくと、しばらくは居喰いをしなきゃなりません、ツイその――」

百太夫の弁解は大分苦しそうでした。

お銀の死骸はその隣の小さい部屋に寝かし、百太夫の女房のお徳と、お銀の妹のお玉が側に付いております。

平次はていねいに線香をあげて、さて死骸の顔を覆おおう布ぬのを取りました。

「――」

ハッと平次も息を呑んだほどのそれは凄じさです。肉付の豊かな通った鼻筋も、反り加減の唇の弧線こせんも、夢見るような霞かすんだ眉も、美しいには相違ありませんが、蠟ろうのような青白い顔は、恐怖と苦痛に歪ゆがんで、二た眼とは見られない痛々しい表情です。それに舌を噛み切ったというにしては、口中に大した脹はれもなく、唇を開けさせると、少しばかりの血溜りはありますが、舌の傷はさ

したるものとも思えません。

「髪が濡ぬれているようだが？」

平次は鬘かつらした下に結った、死骸の頭のあたりを撫なでております。

「少し汚よごれておりますので、これに洗わせました」

百太夫は死骸の足の方に、泣き疲れて俯向うつむいたお玉の方を指しました。これはお銀の妹にしては、色も浅黒く、柄も大きい娘ですが、顔立ちは非常に立派で、名ある歌舞伎役者にも比べられるでしょう。尤も力業にも似た軽業をするだけに、骨組肉付は、若い娘にしては思い切った見事さです。

「お前はお玉というのだな」

「え」

「お銀とは本当の姉妹か」

「え」

「生れは何処だ、——親はどうしている」

「生れは相州の厚木あつぎざい在で、両親とも早く亡なくなりました」

少し太いが、張りのある良い声です。

「お銀はいつ、どこで死んでいたんだ。よく訊きたいが」

「昨夜ゆうべここがはねてから、この部屋の中で死んでいましたよ。皆んな緑町の家へ帰った後で、お玉が見付けて大騒動になったんです」

まくし立てるように、横からお徳は説明しました。疳癰かんしやくすじ筋が青黒い大年増は、恐ろしい達弁の持主で、しゃべり始めるととめどがありません。

「舌を噛んだにしては、血が少ないようだが」

平次は何よりそれが怪しいと睨にらんだのでしよう。床の上にも、

畳の上にも、夥おびただしかるべき血の痕あとなどは一つも残ってはいなかったのです。

「皆んな拭ふいてしまいました。この娘はよく届く娘で——」

お徳はまたお玉を指しました。

「そのとき小屋に残っていたのは誰と誰だ」

「皆んないた筈ですが、不思議なことに一人も居なかったそうです。お玉は隣りの小屋の人を頼んで、緑町の家へ知らせてくれました。緑町へ帰ったばかりの私と主人が駆け着けると、その辺で一杯引っかけていた伝六も、フラフラ歩いていた万之助も帰って、まもなく皆んな顔が揃いっしょいました。その時はもう戌刻半過ぎいっつはんだったでしょう」

お徳はまた奔流ほんりゅうのように捲まぐし立てます。

「お前と百太夫とは、緑町の家へいっしょに帰ったのだな」

「いえ、私が先でした。小半刻ほどして主人が帰ると、まもなく小屋からの使です」

「伝六は何処で呑んでいたんだ」

「横町の叶屋かのうやです。お訊きになればわかります。へえ」

伝六の塩辛声は、後ろの方から響くのでした。ガラッ八は早くもそれを確めに行った様子。

「万之助は？」

「外をフラフラ歩いていましたそうです。あの人は陽のあるうちは決して戸外そとへ出やしません。人立ちがして叶わないって言いますよ。だから、梟ふくろうみたいに夜遅くなってから、フラフラと外へ出る癖があります。——あの身体ですものねえ」

一寸法師の万之助が、日の光を嫌うのも尤もつともですが、そう言う

お徳の調子にはひどく小意地の悪い響がありました。

後はことごとく狩り集めた臨時の男女で、この事件にさしたる関係があるとも覚えません。

「お玉はズーッと小屋に残っていたのか」

「いえ、お玉は日が暮れると身体が明きます。ひと風呂^{がくや}樂屋風呂を浴びて、酉^む刻少し過ぎに緑町へ帰ったが、姉の帰りが遅いので、私と入れ違いに戌^{いっ}刻時分に迎えに来ましたよ」

「途中で小屋から帰る百太夫に逢った筈だが――」

平次はこの複雑な人間の出入りを、頭の中で組織^{そしき}立てて考えている様子でした。

「お前は何時ものように相生町^{あいおい}から河岸ッ縁を帰ったろう」

今まで黙っていた百太夫が口を容れました。

「いえ、松坂町の路地を抜けて来ました」

とお玉。

「そうだろう、俺は相生町から河岸ッ縁を帰ったが、逢わなかったもの」

そう言えば成程そんなものでしょう。

「ところで、小屋の中を見せて貰いたいが」

「へえ、――どうぞ」

百太夫が案内して、舞台から客席、樂屋、風呂場と見せてくれます。

「贅沢な風呂場だな」

「ときどきは芝居の真似事もしなきゃ、お客様が喜んで下さいません。へえ」

百太夫は極り悪そうに首筋を掻きました。そのころ輕業小屋で

芝居をすることなどは、嚴重な禁制だったのです。

「風呂の蓋ふたにほんの少しだが血が付いて居るようだな」と平次。

「先刻、お銀のものをいろいろ洗いましたが」

それは苦しそうな弁解ですが、平次は別に追及しようともしません。

三

近所の噂うわさを掻き集めると、いろいろの事が分つて来ました。第一番に何と言ってもお銀の美しさが問題の中心で、一座の伝六が夢中になっていることや、百太夫までが変な態度をするので、女房のお徳が氣が揉もめる話など、噂の種は際限ありません。

その中でお銀と仲の悪いのは一寸法師の万之助だけで、これはどうせ相手にされないと分り切っているせいか、お銀の機嫌を取ろうとするでもなく、ときどきは一座の花形へ皮肉な悪戯をして、ひどく妹のお玉に怒られたりすることもありました。

「ところで親分、下手人げしゅにんがあるでしょうか」

帰る道々、ガラッ八はたまりかねて平次の脈みやくを引きました。

「お前は思う」

逆襲する平次。

「検屍までもなく、あれは自害じゃありませんね」

「その通りだよ。あの顔は自害した人間の顔じゃない。自害した人間の顔は、どんなに悪相でも、観念したところのあるものだ。

——あの美しさで、あの凄いい形相は——」

平次もさすがに固唾^{かたず}を吞みます。

「舌を嚙んだというのも変ですね」

「人間はあれ位のことじゃ死に切れるものじゃない、第一いくら血が出ていないじゃないか——尤も風呂の蓋^{ふた}には少し血が付いていたが」

「髪も濡^ぬれていましたね」

「あれに気が付いたのか。尋常の濡れようじゃなかった。——耳の穴を見たか」

「いいえ」

「中に少し水が溜っていた」

「へえ——」

「それからもう一つ、変わったことがあった筈だ。気が付いたか、八」

「さア」

ガラッ八の八五郎は頻^{しき}りに首を捻^{ひね}りましたが、このうえ少しも思い当る節はありません。

「もういちど小屋へ帰って見て来るが宜い」

「何を見るんで？」

「種^{たね}を明かしちゃ、手品はつまらなくなるよ。何か変ったことがあったら、それをとことんまで捜し抜くんだ」

「へえ——」

「俺は出直そうと思ったが、こいつはお前の智慧に任せよう。やって見るが宜い」

「さア分らねえ」

「ここで首を捻^{ひね}ったって、何にもならないよ。もういちどあの小

屋へ帰って、検屍に立会って見るんだ」

「へえ——」

「念のために言っておくが、あの妹娘に気をつけろ。お玉とか言ったな」

そう言う平次の背後姿を眺めて、ガラッ八はうらめしそうに立っております。

四

その晩。

「親分、分ったようで少しも分らねえ」

ぼんやり帰って来たガラッ八は、大袈裟に腕などをこまぬ拱いて、平次の前へシヨンボリ坐るのでした。

「何が分ったんだ。まずそれから聴こうよ」

平次はいつになく膝などを乗出します。この報告が余っぽど待ち遠しかった様子です。

「死骸の着物は左前ひだりまえに着せてあったでしょう」

「それだよ、八」

「検屍の役人は何にも言やしませんよ。仏様の着物は左前に決っているんですね」

「それは経帷子きょうかたびらだ。お銀は死んだばかりで、まだ湯灌ゆかんも済んじやいない。舞台上着る赤い振袖の襟を、左前に合せるのは変だろう」

「あつしもそう思いましたよ」

「赤い振袖を左前に着て舌を噛み切るのは、何の禁呪まじないなんだ」

「それが分らないんで」

「お玉に当って見たか」

平次は質問の方向を変えました。

「いろいろ訊いて見たが、あの娘は片意地だ。何にも言やしませんよ」

「本当に何んにも言わなかったのか」

「たった一と言、こんなことを言いましたよ。——何にも訊かないで下さい、今晚中には何もかも分ることですから——って」

「今晚中には分る？——本当にそう言ったか、八」

「それから、天道様は無駄には光らない、って言ったように」

「困ったことになるぞ、八」

「何が困るんです」

「お前はこれからすぐ両国へ引返して、お玉をここへ連れて来てくれ」

平次は大変なことを言い出しました。

「お玉をつれて来てどうするんです」

「何でも構わない、平次が話したいことがある、とか何とか、宜い加減のことを言って連れて来るが宜い。どうしても来なきや、十手に物を言わせるんだ。八五郎の懷中に、そんなものが伊達に突っ張ってるわけじゃあるめえ」

「やって見ましよう」

「人間一人の生命に関わることだ、宜いか」

「大丈夫で」

八五郎は大きく胸を叩くと、もういちど両国へ取って返しました。

八五郎がお玉をつれて来たのは、それから一刻ほど経った頃、

やがて亥刻よつ近い時分でした。

「さア、素直に入れ。あんまり剛情を張ると、俺は十手に物を言わせなきゃならねえ」

門口で又ひと揉もみするのを、

「八、手荒なことをしちやならねえ。お玉の心持は、俺にはよく分っているつもりだ。気の毒なことに、お銀に死なれてがっかりしているんだ」

銭形の平次はそんな調子で手を取らぬばかりに、お玉を誘さそい入れました。

派手な輕業かるわざの太夫に似気なく、汚よごれ腐くさった木綿あわせの袷あわせに、赤い帯を無造作に締めたその晩のお玉は素足に長刀草履なぎなた、髪も、形も、つくろわぬままに荒んで、激しい怒気を含んだ顔には、日頃の美しさとは似てもつかぬ凄じい氣組みなぎが漲ります。

「まず其処に坐れ。——お静、湯でも茶でも持ってきてくれ」

「――」

平次の穏かな調子にいくらか怒気を挫くじかれたものか、お玉はヘタヘタとしてその前に坐りました。

「それから、そのヒ首あいくちは俺が預かって置こう。腹を立てて刃物を持っているのは、決して宜いことじゃない」

「――」

お玉は平次の顔をジロリと見ましたが、言葉の柔かさに似ず、その表情の決然たるのを見ると、懷中からヒ首あいくちを取出して、鞘さやごと黙って平次の前に押しやりました。

「それでよし。——ところで、昨夜ゆうべのことをここで打明けて話して見る気はないか。——それはいやだというのか。金輪際こんりんざい打ち明

ける気はないと言うつもりだろう」

「――」

頑固^{がんこ}に口を緘^{つぐ}むお玉を、撫^{なだ}めるような調子で平次は続けました。「それじゃ、俺が代^かつて話してやろう。――昨夜、姉の帰りが遅いので、お前は心配して緑町からもう一度両国の小屋へ引返したと言ったな。小屋へ行ったが、中には誰もいない。百太夫夫婦も、伝六も、万之助も、肝心^{かんじん}のお前の姉も見えない。お前は空っぽの小屋の中を捜して風呂場へ入った、――と、風呂の蓋^{ふた}を半分ほど上げて、湯の中に人間が入ってる。見るとそいつはお前の姉のお銀だった。お銀は死んでいた」

「――」

お玉はゴクリと固唾^{かたず}を吞みました。

「少し舌を嚙^かんで、口から血は引いていたが、それは風呂に入っているところを、いきなり上から蓋をされて、苦しまぎれに嚙^かんだ傷だ。お銀は風呂の中で溺^{おぼ}れ死んでいたのだ。――風呂の中で病気を起して頓死^{とんし}をしたのなら、自分で蓋をしている筈はない。お銀を殺した下手人は、恐ろしく悪智恵のある人間だが、さすがに、人一人殺してあわてたと見えて、風呂の蓋を取るのを忘れて逃げたんだろう」

「――」

「姉の浅ましい姿を見ると、お前は夢中になって風呂から引上げ、ろくに身体も拭かずに、そこにあった赤い振袖を着せ、あの小部屋に抱いて来て、手当をしたが、お銀はどうしても生き還^{かえ}らなかった。そこでお前は、隣の小屋の留守番に頼んで緑町へ知らせてやった」

「どうだ、それに違いあるまい。——ところでお前は、姉を殺した下手人はよく分っている筈だ。誰だ、それは」

お玉は相変らず頑固に黙り込んでおります。

「お前はヒ首^{あいくち}まで用意している。——が、よく考えて見るが宜い。姉の下手人を殺せば、お上への言いわけは立たない。姉の下手人が誰という、はっきりした証^{あか}りが立たないのに、うっかりした事をする、お前は唯^{ただ}の人殺しにされてお処^し刑^{おき}になるかも知れない。——姉のお銀を殺したのは誰だ」

「証拠がない」

ぶっ切ら棒に言ったお玉。その声は悲しみと怒りに噎^かれて、ひどく陰惨でした。

「証拠がないばかりに、姉の下手人が分つていても、お上に引渡せない。それでお前はその下手人を殺そうと言うのだな」

お玉はうなずきました。

「それは無法だ。もし間違^{まちが}ったらどうする」

「間違^{まちが}はない」

お玉は頑^{かた}なに頭を振るのです。

五

「それじゃ此処で考えて見よう。証拠がないと思ひ込んでも、下手人は飛んだところに足跡^{あしあと}を残しているかも知れない」

銭形平次は、お玉を相手に始めました。お玉はそれを輕蔑し切った様子で、冷然と眺めております。

「お銀を殺しそうなのはまず四人ある。一人は口上の万之助、二人目は木戸番の伝六、三人目は主人の百太夫、四人目はその女房のお徳だ」

銭形平次は委細構わずつづけるのです。その前に八五郎はもういちど両国へ様子を見にやられ、平次の女房のお静は、行燈の側へ来て、二人の話を気遣いながら、更くる夜も構わず、何やら冬支度の仕事をしております。

「——お徳は百太夫より半刻も前に緑町へ帰っている。風呂場でお銀を殺す暇はない。お銀を憎んでいることはお徳が一番だが、どう考えてもこれは下手人ではない。それから木戸番の伝六は、日頃お銀を追い廻していたようだが、輕業がはねる前に身体が明いて、横町の叶屋で樽天神を極め込んでいる。これは多勢の人が見ているから、お銀を殺す暇はなかった筈だ」

平次の系統立った説明を聴くと、お玉の冷たい瞳が、しだいに活気を帯びて、頬は恐ろしい忿怒に燃えます。

「——残るのは主人の百太夫と一寸法師の万之助だ。万之助とお銀は互に敵同士みたいに仲が悪かったそうだ。万之助は負け惜しみが強くて皮肉で、お銀の様子が癩に触ってたまらなかったんだろう。——美しい女はたいい高慢で人を人とも思わない。お銀もそうだった。——だがそれは表向で、万之助の腹の中は、お銀が好きで好きでたまらなかった。万之助は負け惜しみが強いから、自分の身体に恥じて、口にも出さず、素振りにも見せなかったが、

腹の中では毎日泣いて暮していた。万之助の日頃の様子——わざとらしい皮肉や意地悪や、先刻お銀さつきの死骸を見た眼の恐ろしい悩みは唯事ではない。その万之助は、暗くなると、自分の心のやり場がないので、氣狂いのようになって外を歩いた。昨夜ゆうべも外を歩いていたというが、誰にも逢った様子はなく、誰も見た者はない。風呂場に隠れていて、お銀を殺さないとは限らない」

「——」
「百太夫は主人だが、多分金ずくで無理にお前たち姉妹を、コキ使っているんだろう。伝六に訊くと、百太夫はお銀に無理な芸をさせようとしていたそうだ。若い女には、我慢の出来ない恥ずかしい芸だったと思う。——それが嫌なら俺めかけの妾うそになれと言っていたそうだ。これは伝六の言葉だが嘘うそではあるまい。お銀はそれ从头から断り通していた。その上お前たち姉妹が借りた金も大方返した筈だし、お銀とお前は近いうちに、あの蟹沢かにざわの一座から飛び出して、故郷の厚木あつきへ帰るつもりだった。——その通りだろう。これはお徳に聴いたのだ」

「——」
「百太夫は死物狂いになって、お銀を引留めようとした。お銀はどうしても聴かない。そこでフラフラ殺す気になった——どうだ、それも本当らしいだろう。それからお前が緑町から両国へ引返したとき、どの道を通ったと訊いたのは百太夫だ。お前が松坂町の路地を通ったというと、——俺は相生町あいおいの河岸ツ縁をまっすぐ帰った、だから逢わなかった——と言った。実はあのとき百太夫はお銀を殺して、まだ小屋の中でマゴマゴして居たのかも知れない。疑うたがいがかかると困るとか何とか言って、女房と口を合せて、

大分前に帰ったような事を言ってるが、そんな細い細工こまかをするのは身に覚えのある奴に限ったことだ」

「――」

「何方だ、万之助か、百太夫か、お前の姉を殺したのは？」

「証拠がない」

お玉の答は相変らずうめくようです。

その晩平次とお静はほとんど寝ずの番をさせられてしまいました。弾み切った少女お玉は、ともすれば飛び出して、両国へ帰ろうとするのです。

両国へ還かえったら最後、その晩のうちに、もう一つ血腥い事件ちなまぐさが起らずには済まないでしょう。もしそれが相手を間違ったとしたら、それこそ取返しのかぬ事になるでしょう。

運よくお玉の感が当って、姉のお銀を殺した、本当の下手人を殺したとしても、証拠がなくては言い分が立たず、この純情な娘は自分の命を棒に振るのが精々です。

大骨折の一夜はようやく明けました。

「あッ、あの人か、何処かへ行ってしまいましたよ」

お静の声に驚いて、顔を半分洗った平次は井戸端から家の中に飛び込みました。

「どうした、何処へ行った」

そんな事を言ったところで追付きません。お玉は僅わずかの間すきを狙ねって、逸はやり切った奔馬ほんばのように、両国へ駆け戻ったのでしよう。平次はすぐ後を追いました。が、軽業娘の軽捷けいしょうさには及ぶべくもなく、汗みどろになって両国へ辿たどり着くと、

「あッ、親分、大変ッ」

蟹沢^{かにざわ}の小屋の裏口に迎えたのはガラッ八の八五郎です。

「どうした、八」

「遅かった、親分。とうとう殺されましたよ」

「誰が、誰に」

ガラッ八を押しつける様にして飛び込むと、一昨夜の惨劇^{さんげき}のあった風呂場の流しに、これは着物を着たままの百太夫が、紅に染んで死んでいるではありませんか。

その側に杲然^{ほうぜん}と突っ立っているのは、なんと、ツイひと足先にここへ来た筈のお玉。

「お玉、何という事をするのだ」

「親分、私じゃありませんよ。でも、姉を殺したのは此奴です、私にはよく分ります」

百太夫の死骸を指すお玉には、何のうろたえた様子もなかったのです。

「親分、百太夫を殺したのは、お玉じゃありませんよ。あの一寸法師ですよ。万之助の野郎ですよ」
「？」

銭形平次はガラッ八の言衆を、夢心地に聴きました。江戸開府以来の名御用聞も、この時ほど馬鹿馬鹿しい思い違いをしたことはなかったのです。

×

×

間もなく万之助の死骸は、両国橋の下から揚^{あが}りました。お銀の怨^{うらみ}を晴した純情の一寸法師は、自分から身を投げて死んだことと言うまでもありません。

「今度ばかりは親分も見当違いをしたでしょう。百太夫を殺した

のをお玉と思い込んだ親分の顔は、全く忘れられませんよ」

ニヤニヤするガラッ八です。

「全く一言もないよ。それというのも、さいしょお銀を殺したのが、百太夫か万之助か、どうしても分らなかつたせいだ。——だが万之助はあの通り身体が小さいから、たとえ女一人でも、風呂へ入ってるのを上から蓋ふたをして、死ぬまで押えている力はない。それに気が付かないばかりに、ひと晩無駄な苦労をしたよ」

「へえ。——親分でも気のつかない事があるんですか」

「だがな、八。俺にも隠してある役札がもう一枚あるよ。それは、大した事じゃないが、お玉は女じゃないと看破みやぶったことさ」

「へえッ、冗談じゃありませんか、親分」

「あれは確たしかに男だ。——十六かな、十七位かな、とにかく女の子ではない。女の子なら人形遊びで馴なれているからどんなにあわても左前に着物を着せる筈はない。それにお玉は綺麗ではあるが男顔だ。多分百太夫の智恵だろうと思うが、男の子を女に仕立て、激はげしい芸をさせて人気を取ったんだろう。それにお銀ときょうだいというのも嘘うそだろう、顔がまるつきり似ていない」

お玉の激怒の中には淡い恋の潜ひそんでいるのを平次は見逃さなかつたのです。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「文藝讀物」昭和十八年十二月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第八卷 河出書房 昭和三十一年八月十五日初版

編集・発行 錢形俱樂部